

東日本大震災を経験された方々から学ぶ
～食を通して考える私たちのこれからの暮らし～

三重大学教育学部附属中学校
教諭 吉岡 良江

I はじめに

中学校家庭科では、「生活の主体者として自立すること。家族をはじめとする他者とともに、生活課題の改善や解決に取り組むこと。明日の生活環境・文化をつくることのできる資質・能力を育むこと。」を目標に据えており、ESD の理念との親和性が非常に高いものとなっている。東日本大震災を機に、より現実味を帯びたものとして、これらの資質・能力の育成が求められるようになってきた。しかし先行研究等に注目する限り、家庭科において、ESD の理念を踏まえた実践例はまだ数少ないように思われる。ESD の視点に立った中学校家庭科の授業をさまざまな切り口で展開し、その実践を通して ESD としての家庭科教育の可能性を明らかにすることは、今後の中学校家庭科の方向性を見出す上で、その一翼を担うものとして必要と考える。

このような状況を踏まえ、「ESD の視点に立った中学校家庭科の授業実践」として、東日本大震災を主テーマに据えた授業を内容ごとにさまざまな切り口で展開するとともに、思考力を主とした生徒の学びの変容をはかることにより、ESD としての家庭科の可能性を明らかにすること、今後における中学校家庭科のめざすべき方向性を明らかにすることを目的として取り組みを進めている。

本実践は、その中の食生活に焦点をあてたものである。持続可能性を鑑みた今後のよりよい暮らしの実現に向けて、食を切り口としたエネルギー・環境問題に向き合うことで、そのねらいに迫りたいと考える。

II 実践の概要

1 対象

M 大学教育学部附属中学校1年生144名を対象とした。平成28年1月から平成28年2月にかけての実践である。「住生活と自立」の内容とリンクさせた「東日本大震災を経験された方々から学ぶ ～仮設住宅を通して考える私たちのこれからの暮らし～」の実践を2学期に終えた段階である。

2 ESD の視点に立った教科指導について

これまでの取組を踏まえ、「日常生活の中に実在する生活課題の中から学習課題を設定するとともに、その解決に向けて、教科の本質に迫る探究の学びを展開することができるもの」「教科としてのねらいに迫りつつ、持続可能性についての思考を深めることも可能とするもの」これらを満たした指導を「ESD の視点に立った教科指導」とする。

3 ねらい

<教科としてのねらい>

「B 食生活と自立」の(1)「中学生の食生活と栄養について」の ア・イ、(3)「日常食の調理と地域の食文化について」の ア・ウとの関連をはかりながら、

- 被災地における食の役割について意欲的に考えることができる。【生活や技術への関心・意欲・態度】
- 今後起こり得る災害を想定して、被害を未然に防ぐため・被害を最小限に食い止めるために、自分たちにできることを提案することができる。【生活を工夫し創造する能力、生活の技能、生活や技術についての知識・理解】

< ESD としてのねらい >

- リスクマネジメントの視点で、これからの暮らしを考えることにより、短期的には不利益を被っても、長期的にみて、持続可能な社会の実現に向けて主体的に取り組む態度を育成する。
- さまざまな問題解決のために、仲間をはじめとする多様な他者と話し合える力及びよりよい解決等を探る態度を育成する。
- さまざまな問題解決のために仲間をはじめとする他者の多様な考えを聴き、自己の考えや価値観をより豊かなものにすることができる。

4 授業の実際

題材名を「東日本大震災を経験された方々から学ぶ ～食を通して考える私たちのこれからの暮らし～」とし、全5時間の指導を行った。

(1) 第1次 被災地における食の役割について考えよう

〔食生活と自立〕において学んだことを生かして、災害時における食の役割について、東日本大震災での体験を基にした小学生の作文（JA ごはん・お米とわたし 作文・図画コンクール内閣総理大臣賞入賞作文）及び非常食だけで1週間過ごして明らかとなった問題点と問題解決のためのてだてについて記された新聞記事（日本経済新聞 プラスワン）を基に考えさせた。災害時の食については、「非常食＝生きるための糧」と捉える向きが強かったが、避難生活の長期化により、「生命維持のため」だけではなく、「心身ともに健康であり続けるため」の役割をも担うということ、そのためには、五感でおいしさを味わえること、温かいものを温かい状態で食することが重要になることに気付くことができた。

(2) 第2次 災害時におけるライフラインの実態について知ろう

前次の学習を踏まえた上で、災害時であっても、おいしい・温かいと実感できる食事を提供するために欠くことのできない水道・ガス・電気などが、発災後どの程度の時間を経て復旧したのか等について学んだ。

(3) 第3次 災害時を想定した調理にチャレンジしよう～調理実習の計画～

被災地でいくつかのボランティア団体が実際に行った炊き出しを参考にして、余熱の力を利用した調理実習の計画を立てた。献立は生徒の意見を基にして、にんじん・大根・じゃがいも等身近な野菜を用いた味噌汁とミネストローネ、そして炊飯とした。調理自体は簡単なものであるが、被災地での炊き出しを想定しつつ、彩りや栄養のバランス、水溶性ビタミン・脂溶性ビタミンの特性を生かした調理の提案等、これまでに学習したことを生かした調理を行いたいという意見が多数あがった。

(4) 第4次 災害時を想定した調理にチャレンジしよう～調理実習～

鍋カバーや毛布等保温のための道具の違いによって、できあがりによどのような差が生じるのか否か比較ができるよう、その他の条件（野菜の切り方や保温時間等）は一致させた上で、グループごとに分担して、味噌汁・ミネストローネを調理した。調理後には、各グループが作った味噌汁・ミネストローネの食べ比べを行った。

(5) 第5次 私たちのこれからの暮らしについて考えよう

調理の振り返りから、被災地での食のあり方について再度考えさせるとともに、日頃特に気に留めることもなく使用している、自分たちにとって身近な資源には限りがあるということを、データを基にして考えさせるとともに、「あるから使う」でではなく、「あるものを有効に使う」という発想で暮らすことの意義についての話し合いを行った。

5 まとめと課題

エネルギー・環境問題についての学習は、技術科・理科・社会科・国語科等でも取り扱われており、他教科での学びを本実践に生かすことができるのではないかと考えられたが、

第 1 学年の現段階では、まだ十分に反映させることができなかったように思う。またその一方、自由研究等で自主的にエネルギー・環境問題や震災をテーマにした課題解決学習に取り組んだ経験のある生徒は、非常に高い知識をもっており、大変意欲的に取り組むことができたように思われる。獲得した知識を自らの生活につなげるレベルにまで高めていけるよう、またいずれの生徒においても、自分自身にとっての課題として受けとめていけるよう、実践の見直し・改善を図っていくことが今後の課題である。

生徒が書き綴った感想や振り返りシートへの記述からは、教科としてのねらいは概ね達成できたものの、持続可能性を鑑みた思考の育成には十分な検討・指導の見直しが必要であると思う。



6 参考文献

国立教育政策研究所.(2013).学校における持続可能な発展のための教育（E S D）に関する研究最終報告書.国立教育政策研究所.

田中 重好・船橋 晴敏・正村 俊之.(2013).東日本大震災と社会学.ミネルヴァ書房.

日本家庭科教育学会.(2013).第 56 回大会 研究発表要旨集.

日本家庭科教育学会北陸地区家庭科カリキュラム研究会.(2003).生活主体を育む家庭科カリキュラムの理論と実践.,北陸地区家庭科カリキュラム研究会.

文部科学省.(2008).中学校学習指導要領.文部科学省.

望月 一枝・日景 弥生・長澤由喜子.(2014).東日本大震災と家庭科.ドメス出版

平成 24 年版食育白書 <http://www8.cao.go.jp/syokuiku/data/whitepaper/2012/pdf/b1sho3-01.pdf>

東日本大震災の体験談 2 - 非常食まとめ <http://emergent-food2.kiriks.com/entry40.html>

非常食だけで 1 週間試してわかった問題点と対策：日本経済新聞
www.nikkei.com/article/DGXDZO51250030RooC13A2W03201